環境は守られるべきものか
―今道友信『エコエティカ』書評

環境は誰のためのものか

幼いころ、科学技術の輝かしい発展――それはアポロ11号の月面着陸だったりしたのだが――を目の当たりにした私は、この「偉大な文明化作用」によってきっと人類はより良い生活を享受できると確信していた。

しかし現実には、水俣病など環境汚染によって多くの人々が犠牲になり、森林伐採や地下資源の乱掘によって地球環境に重大な被害を及ぼしていることが明らかになってきた。当時の私にはそういった現状に抗う感受性は無かったが、何か漠然とした不安感のようなものを感じていた。

今から思えばバラ色の未来なんて所詮「絵に描いた餅」だったのさ、なんてニヒルに決めてしまうこともできるが、それでは余りにも無責任だろう。私たちの世代は前の世代から「高度経済成長」という恩恵を無前提に享受してきた。勿論それが他の様々な人々やほかならぬ自然の犠牲の上にもたらされたものであることも知って

いる。

故に、このような現状に対して「過去から受け継ぎ、未来へ委ねる」責任を負っている私たちにとって、今何が問われているのか考えてもいいのではないか。

例えば環境汚染や森林伐採を止めさせる、法律なり決まりを作って皆に守らせると主張してみよう。しかしすぐさまその意見は「現在自分達が生活している現実の根拠を否定するのか。」というような批判を受けることになってしまう。

私たちは好むと好まざるとに関わらず、二十一世紀の資本主義社会という今を生きている。そのダイナミズムのなかでこの問題は考えられるべきである。

今道友信氏はその著書『エコエティカ』のなかで「よい文化をできれば創造し、文化を伝承すること、自然をよい状態に維持することは、続く世代や未来の人々への、われわれの倫理的責任です。」（注1）と現代社会において倫理の復権を主張している。

倫理というと、とかく「何々するべし」とか命令形で語られることが多いが、現実には医療現場におけるバイオエシックスの知見しかり、生命倫理の場面で生死をめぐる判断を決定する際に用いられる事が多い。

哲学者の和辻哲郎が『人間の学としての倫理学』のなかで述べているように、倫理とは「人間共同態の存在根底たる道義」であり、「間柄」＝関係性をあくまでも問題にしていることがわかる。ここからいっても、その倫理思想は現実の社会のパラダイム次元で考察され、そこでの共同主観性の検討を通じた社会的諸関係の是非を問題にしていかざるを得ない。

自然―人間という二項対立のもとで、限りなく恵みを与える対象としての自然環境というシェーマを単純に逆転して、守られるだけの対象にしてしまうのではない、もっと生き生きとした自然と人間との関係性を考えて

みたい。

注1 ― 講談社学術文庫『エコエティカ―生圏倫理学入門―』P8（以下ことわりのない場合、引用は本書による）

エコエティカがめざすもの

この本文を一読して、わたしは少し意外な感想を持った。エコ（生態）エチカ（倫理）という本題の持っていたイメージは、自然環境の資源としての有限性を訴え、欲望の赴くままに限りある資源を収奪してはならない。といった「お固い」道徳論であった。だから環境倫理が社会的にもてはやされている中で、ほんの予備知識程度のつもりで読みはじめたのが、とんだ誤算だったという訳である。

そもそもエコエティカの「エコ」は、一般的な意味での「エコロジー」のエコではなく、ギリシャ語の「オイコス」が語源の生息圏を意味している。その意味では「生圏道徳学」若しくは「生圏倫理学」と訳すのが正しいらしい。

もちろん、この著者である今道氏も問題意識としては、地球資源の枯渇という破滅的現実を前にして、今わ

れわれが何をなすべきなのかを問い掛けているのだが、私が興味を持ったのはそれを単に現実への対処として、なにか道義的な責任を求めてしまう問題に切り縮めてしまうのではなく、価値観の問題、つまり人間の生き方の問題として捉えている点である。

「エコエティカは、もろもろの領域における職業倫理としての規律とはちがって、それらへの演繹も場合によっては可能であるような、根本的な道徳哲学的反省としての学問的体系をもつ倫理学であります。」（注1）ここで今道氏によって構想されていることは、ひとり自然環境の保全に止まらない。バイオエシックスの分野などで取り沙汰されるような生命倫理の問題をもふくむ、広いパースペクティブをもった問題意識である。少なくても私は、この問題意識においておおいに共感する。

では、その「エコエティカ」がめざす方向とはいかなるものなのか。

今道氏によれば、それはナショナリズムではなくインターナショナリズムで考える倫理であるという。どういうことだろうか。現代社会では科学技術の発達によって新たなる環境が作りだされてしまった。（これを今道氏は「技術連関」と呼ぶ）この環境下で生産と効率化が目的意識化されることにより時間性が圧縮され、同時に人間の倫理的思考さえ圧縮されていくのだという。まずこのダイナミズムについて見ていきたい。

人間はポリス的動物であるといったのはアリストテレスであったが、言語＝意識を持ち、他者とのコミュニケーションを通じつつ相互に諸関係を取り結ぶ。

このようなコミュニケーションが、人対人（ないし人対物）という対面的な関係で行われている場合には倫理学も従来通り対面倫理を説けば良かったのであるが、近代文明発達以降、人間の行為の次元が、固体間の直接性ではなく間接的な次元へと変化してきた。

人間の能動的な行為としての生産が、利益還元型の大量生産へと変わってしまったがゆえに、不特定多数の

人々との見えざる関係を結ぶことになる。今道氏によればそれは「隣人的なるものの無限定的増量」（注２）であるという。

最近「ストーカー」という病理が社会現象になっていて、テレビドラマなどでも扱っているので多くの人が見聞きしているのではと思うが、距離という概念が地理的にも時間的にも希薄になってしまって、何万キロも離れた「隣人」から突然脅迫電話が来るなんてミステリアスなことも起こりうる。特に最近のインターネットという新しいコミュニケーション手段によってそれが加速しているのが現実である。

このような人間のエコロジカルな生活状況の変化に伴って、今までとは違った価値観が生み出されてくるのであり、それが「行為の三段論法における逆転」なのだという。今道氏の言うところの「倫理的思考の圧縮」である。

具体的にはアリストテレス『ニコマコス倫理学』との対比で論じられているのだが、要約すると、行為（プラクタ）というのは、あることが望ましいと思い、その目的（テロス）を実現するための手段を選択（プロアイレシス）する。そのときの基準になるのがもっとも立派で（カリスタ）もっとも容易な（ラーイスタ）ことであり、これがアリストテレスのいう「行為の三段論法」（シュロギゼスタイ）というわけである。（注３）

分かりやすく言えば、目的があって手段がそこから導き出されるという演繹法に対して、技術連関に基づく現代の技術環境にあっては、その逆転が意図されていて、言わば帰納法的な行為の推論がなされるわけである。

原子力に代表される発電の手段が現代の社会では自明理に存在していて、目的をそこから選択する構造になっているわけであり、ラーイスタ・カイ・カリスタなテロスが目指されず、ひいては人間の行為における倫理的思考が欠如していくというわけである。

このような現代における病理をなんとか解決したいというのが今道氏のテーマであって、その意味で極めてま

っとうな主張であると思える。しかし同時に一方で物足りなさを感じる。それは現状を憂いている氏自身が、御執心であるアリストテレスの最も価値とした観照（テオリア）の立場から一歩も外に出ようとしないことである。

注1 ― 同書 P9
注2 ― 〃 P37
注3 ― 〃 P142

テオリアを超えて

企業のキャッチフレーズではないが、「地球にやさしい」と言いつつも、商品を過剰に包装してしまう矛盾には、腹立たしさよりむしろ憐れみさえ感じてしまう。とはいいつつも時節柄クリスマスには二束三文のプレゼントをありとあらゆる包装で一生懸命飾っている自分の存在を無視して、エコを声高に論じることはできないだろう。

このように一般的にいって、いわゆる環境保護運動がよってたつ価値観は、現行生産諸関係のもとで地球環境にとって重大な危機が間違いなく起こっているにも関わらず、そこに視点をむけるどころか、それに安住してい

る自分と、現状を憂い環境保護に携わっている自分との価値観上の矛盾である。

まさに人類史的危機と呼べるものがあるならば、それは現行の資本主義がもたらした産業文明の編成にあり、単なる小手先の対処によって解決される問題ではないということは明らかなのであるから。

その意味で言えば、故廣松渉氏が今日、生態学的危機を前にして、財貨の（従って、生産と消費の）評価基準、経済的価値の評価基準を一新すべく、歴史的に要請されている。と『生態史観と唯物史観』のなかで述べられているが、今道氏の主張同様に、それはその通りだと頷かずにはいられない。

現在の近代工業の副産物として、例えばフロンガスによるオゾン層の破壊が紫外線の大量の降散を引き起こしていたり、炭酸ガスによる地球温暖化の問題によって南極の氷が解けだしたりするという事態は、なにも「ハリウッド・スペクタクル映画」だけの専売特許ではなく、今現実に起こっていることなのだ。

また第二次大戦後、アメリカを始めとする先進諸国が、押し進めた大量生産・大量消費型＝欧米物質主義的な生産関係によって、「北」諸国への一挙的な富の集中があり、その対局にアフリカの栄養失調の子供が象徴しているように、「南」の諸国に対する絶対的貧困がもたらされている。世界人口の16％にあたる十一億人余の人々が今日、明日の命も知れない状態にさらされているのだ。

この現実を前にして、私はなんとしてもこの搾取と収奪の構造を変えたいと思うし、本当の意味で平等な社会の到来を心から望む。そのような視点から見たときに今道氏の論じている内容が問題になってくる。

それでは「エコエティカ」のめざすオルタナティブはなにか。

今道氏によれば、それは新しい徳目の創造であるという。今道氏はこの徳目を①フィロクセニア（異邦人愛）、②定刻性、③国際性、④語学と機器の習得、⑤エウトラペリア（気分転換）という五つに分類しているが、例えば⑤のエウトラペリアというのは、先にもあげた『ニコマコス倫理学』でアリストテレスが徳目としてあげてい

たもので、意味としては道化と野暮の中庸という意味である。今道氏によれば「機械のしがらみや人間組織のからくりに閉鎖された自己を解放させることであり、そして他人をそこに誘うような知的な徳目になる」（注1）と主張している。

今道氏の意識の在り様としては確かに妥当なのかもしれないが、私は現実の矛盾に対する回答をなにも与えていないのではと思う。

そもそもアリストテレスにしてからが、行為をプラクシス（実践）、ポイエシス（製作）、テオリア（観照）に分離し、テオリアこそ至上の行為であると規定していた。今道氏の発想の根底にはこのテオリア至上の価値観から現実をみるというバイアスがかかっていると言わざるを得ない。

かといって、形而上学でいうところのプラクシスを、短絡的に行動実践に結び付けることには注意が必要である。なぜなら、古代ギリシャ哲学の行為とは常に目的（telos）に内在化された倫理的な行為であるからである。

それでも、敢えてこう言おう、かつて実存主義者と評されたサルトルは「飢えて泣く子を前にして哲学に何ができるか」と鋭く自らを問うた。同じように私は氏に問いたい。滅びゆく地球を前にして倫理になにができるかと…。

注1 ― 同書 P120

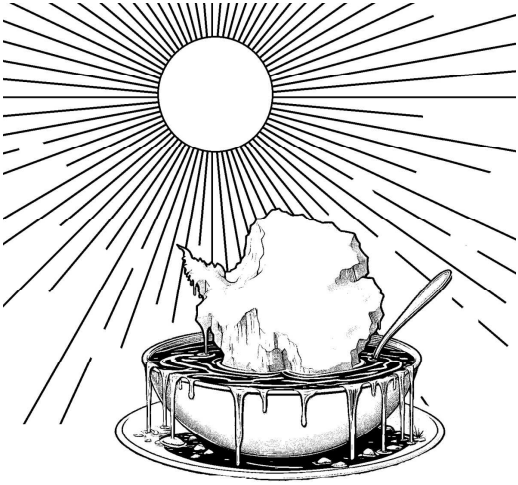
エコエティカと現代

この文章は、二〇〇〇年代の初めに書いたものであるが、その後、東日本大震災が発生し、東北地方を中心に津波による甚大な被害がもたらされ、福島第一原子力発電所では水蒸気爆発によるメルトダウンによって、現在に至るまで深刻な放射線被害に苛まれ続けている。

その当時は、フォイエルバッハを批判するカール・マルクスよろしく、内容の吟味も然程無く、唯物論者が観念論者を見下すような批判に終始していた。今から見直すと「赤面する」ほど恥ずかしい限りだが、今回この文章を再び取り上げようと思ったきっかけは、東日本大震災から十年を経過し、毎年のように「異常気象」が叫ばれるようになった昨今の「異常な環境」を前にして、言葉の上だけではない「生圏倫理学」が、全世界的に求められているのではないかと感じたからである。

前述したように、東日本大震災を経験した日本のこの状況を、哲学者として今道氏はどのように見ていたのか。今道氏は東日本大震災の翌年二〇一二年に大腸がんによって死去されているが、氏が生前に述べていた文章から、その熱い想いが伝わってくる。

「エコエティカからの切なる要求として「危機管理省」と「エネルギー省」を絶対に作るべきです。エネルギーは今、電気になっていますが、その電気を原子力でつくるのが良いのかどうかや、太陽発電について政府が真面目に考えなければならないのではないでしょうか。」（今道友信「エコエティカと文明」千葉大学 公共研究 第四巻第二号（二〇〇七年九月）P18）

これを震災以前に主張されていたということについては驚きを禁じ得ないが、国連でＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）が採択され、環境意識が高まってきた現代にあって、エコエティカの発想はいよいよ必要性を増してきているし、判断基準として益々必要な倫理観になっているといえる。

アメリカのトランプ大統領の如き、「アメリカ・ファースト」がどれだけ時代を逆行させ、環境に負荷を与えたのか。私たちはこのような人類の絶滅にしか繋がらない、この悪しき倫理観を乗り越え、「エコ・ファースト」な倫理観の再構築に踏み出していかなければならないのではないか。エコエティカはその礎となる倫理を私たちに指し示していると思うのである。